

【原の《技術者一口メモ》[02]】

明治を牽引した密航者たち—長州五傑—

第2回の《技術者一口メモ》では、「明治を牽引した密航者たち」と題して、長州の伊藤博文、井上勝らについて、今回は薩摩の五代友厚たちの命をかけた密航劇企ての様態と、帰国後の近代日本の黎明期に土木事業、産業界、政界等の各分野で明治の近代化をリードしていった彼らの活躍について紹介する。

【I】長州五傑

① 長州藩士5人の密航劇

幕末の諸藩の中で最初に密航留学生を送り出したのは長州藩であった。この時のメンバーは五人で、年代順に井上聞多(井上馨)(28) 遠藤謹助(27)、山尾庸三(26)、伊藤俊輔(伊藤博文)(22)、井上勝(20)である。

5人の中で密航計画を主導したのは井上聞多であり、井上も師の吉田松陰と同様、佐久間象山の思想に共鳴して行動を起こしている。同じ頃、藩内には井上聞多以外にも洋行の希望を抱いている者がいた。井上勝と山尾庸三である。

三人は、ほぼ同時期に藩上層部に働きかけを始め、留学が実現できるよう協力を要請しており、文久3年(1863年)4月18日に藩主毛利敬親から井上聞多、山尾、井上勝に、イギリス留学の内命が下る。藩主の許可が下りた後、同様にイギリス遊学の決意を固めていた伊藤俊輔と江戸で航海術を学んでかねてより洋行を希望していた遠藤謹助が加わり五人の顔ぶれが最終的に決まった。

その後、井上聞多らは駐日イギリス領事のA・ガワーを訪ねて渡航の協力を求めて快諾を得るが、ガワーの「五人で五千両が必要」との主張には余りの高額に頭を抱えた。

思案のあげく、長州藩が来たる日に備えてアメリカから小銃を購入するために用意していた資金一万両を担保に、同藩出入りの商人大黒屋番頭の佐藤貞治郎に借り入れを要請している。佐藤は、江戸藩邸留守居役の村田蔵六、のちの大村益次郎のお墨付きがあればという条件付きで貸し付けに応じている。

五人は密航直前に村田蔵六と佐藤貞治郎の二人を招いて感謝の宴を兼ねた別れの盃を酌み交わした。その際に伊藤がその心境を詠んだのが以下である。

『ますらおの恥を忍びて行く旅は 皇御国(すめらみくに)の 為とこそ知れ』

このようにして、長州藩家老の周布政之助の工作で外国出張を認められ五人は脱藩後、文久3(1863)年5月12日に横浜を出港してイギリスに向けて密航を決行した。

ところで、吉田松陰、高杉晋作、大村益次郎など、長州の優秀な人物を見いだした時の藩主の毛利敬親(1819~1871)は、家臣の意見には何事も「そうせい」と答える寛大な藩主でもあったとのことであり、彼らの密航計画実現には理解ある開明的藩主に恵まれていたことも幸いしたのではないだろうか。

五人は、5月18日に上海到着後、2隻の船に分乗しインド洋を横切り、喜望峯を回って大西洋を北上し目的地まで無寄港航海を続けた。井上聞多と伊藤を乗せたペガサス号がロンドンに到着したのは9月23日、日本を出てから四ヶ月余りが経過していた。

② 長州五傑

彼らのロンドン生活が半年を過ぎたある日、井上と伊藤は英米仏蘭の四カ国連合艦隊が近々、下関攻撃を計画していることを『ロンドン・タイムス』の記事で知り驚愕する。当時、世界最強の経済力と軍事力を持つイギリスを筆頭に三国会わせた列強の攻撃を受ければひとたまりもない。

二人は何としても事の重大さを長州藩に伝え戦争を回避させねばと急遽帰国を決意し、1864年3月中旬にロンドンを離れた。他の三人も帰国を希望したが、井上が押し止めた。二人が横浜に戻ったのは6月10日、下関戦争が勃発する約二ヶ月前のことである。

その後、ロンドンに残った三人のうち、山尾庸三は造船業の盛んなスコットランドのグラスゴーに移り、昼は造船所の見習い工として働き、夜はアンダーソンカレッジで造船理論を学んだ。井上勝は、ロンドンで鉄道や鉱山学を学び、山尾と共に明治元年(1868年)11月に、五年半ぶりに帰国する。山尾は、工部省設置に尽力し、生涯を工業の発展に捧げたことから、のちに「日本の工業の父」と、井上勝は「日本の鉄道の父」と呼ばれる。

一方、貿易や経済学を学んでいた遠藤謹助は、途中肺病を患い、山尾らより二年早く帰国するが、帰国後は大蔵省に出仕して近代的な貨幣制度の導入に取り組み、造幣局長を務めたことから彼も「日本の造幣の父」と呼ばれる。今では関西圏で有名になった大阪造幣局の「櫻の通り抜け」は、明治16年(1883)に時の局長だった遠藤の発案により始まったという。一方、伊藤博文は我が国初代の総理大臣(1885)を務めたことから「日本の内閣の父」と、井上馨も伊藤内閣の下で初代外務大臣に就任し「日本の外交の父」などとそれぞれが呼ばれる。

密航留学者のこの五人は、近代日本の黎明期に明治の近代化を各分野でリードしていった。

後にこの五人は、彼らの偉業を讃えられて長州五傑(長州ファイブ)とも呼ばれることとなる。

写真-1はイギリスでの長州五傑の面々である。

(後列左から遠藤謹助(27) 井上勝(20) 伊藤博文(22)
前列左から井上馨(28) 山尾庸三(26))



写真-1 イギリスでの長州五傑の面々

『空しく隔靴搔痒(かっかそうよう)の嘆を抱くときに
にらず、寧ろ一躍外国に渡り親しく其物情を視察し、
其技術を実習し、以て速やかに国家の急に応ず可き』

井上 勝

【参考図書】

1. 「明治の技術官僚」 柏原宏紀著、中公新書
2. 「明治を作った密航者たち」 熊田忠雄著、祥伝社新書2016.2

以 上